

詩評から見る査慎行の詩学思想

——『初白庵詩評』を中心に——

郎 潔

はじめに

清初詩人の査慎行（一六五〇～一七二七）⁽¹⁾は生涯を通じて万首を下らない膨大な数の詩を作った。査慎行の詩に対する当時の人の評価は高く、査慎行は清初六大家の一人と位置づけられ、又、趙翼の『瓠北詩話』は、唐、宋の諸大家の後を継ぐ者として、彼と呉梅村の名を挙げ、古今の十大詩人の列に加えて賛辞を惜しまなかった。⁽²⁾徐世昌の『晚晴簃詩匯』巻五十六に査慎行の詩について「專取徑於香山、東坡、放翁、祧唐祖宋、大暢厥詞、為詩派一大轉關（香山〔白居易〕、東坡〔蘇軾〕、放翁〔陸游〕の詩法を専らとし、遠くは唐詩を、近くは宋詩の道を祖とし、大いに発揚して、詩派の一つの大きな転換点となった）」⁽³⁾とあるように、査慎行が清初の詩壇の分かれ目に占める大きな役割は高く評価されている。

査慎行は生涯詩の創作に全力を注いだが、詩学の主張に関しては、査為仁の『蓮坡詩話』に、以下のような記述がある。「家初白老人嘗教余詩律：詩之厚，在意不在辭；詩之雄，在氣不在直；詩之靈，在空不在巧；詩之淡，在脫不在易，須辨毫髮於疑似之間（同族の初白老人が嘗て私に詩律について教えてくれた：詩の厚は意にあり辭にはない；詩の雄は

気にあり直にない；詩の靈は空にあり、巧にはない；詩の淡は脱にあり、易にはない；本物かそうでないかは、少しの違いでも見分けなければならない。⁽⁴⁾」初白老人とは査慎行を指す。ここに見える以外には、詩学の專著で査慎行の詩学に関する主張を見ることはできず、序、跋、書等の文章で論じられることもごく僅かである。査慎行が詩に求めた所謂「厚、雄、靈、淡」の四つの審美基準の内包ないしは査慎行の詩法を探るには、査慎行の各作品に散見する言葉の端々がてがかりになると思われる。本論が検討する『初白庵詩評』⁽⁵⁾はその手がかりになる一つ重要な材料である。

『初白庵詩評』は浙江省海塩の蔵書家、張載華が整理した査慎行の批注集で、全部で十二種に上り、それぞれ陶潛、李白、杜甫、韓愈、白居易、蘇軾、王安石、朱熹、謝翱、元好問、虞集及び『瀛奎律髓』の選詩に対する批注を集めたものであり、内容は主に考証、解釈、感想、質疑、議論等、多岐にわたる。理論的な著述ではないが、査慎行の詩法の軌跡を窺うことができる。

本論は査慎行の『敬業堂詩集』に散見する詩論を参照しつつ、査慎行の『初白庵詩評』を中心に、その批注を分析整理し、詩人の詩学趣旨を探ってみた。また、査慎行の詩学思想における杜甫と蘇軾の影響をも視野にいて考察したいと思う。

一 「凡讀一詩必先觀作者命意所在」

「凡讀一詩必先觀作者命意所在（凡一首の詩を読む時、必ず先に作者の寓意の所在を見るべきである）。」査慎行は杜甫の「建都十二韻」についてこう語る（『初白庵詩評』巻一）。又、韓愈の「詠雪贈張籍」の「松篁遭挫折（松や竹は挫折に遭う）」について、「有寓意便佳（寓意があればよい）」と評価する（『初白庵詩評』巻一）。詩は必ず寓意のあるものを重んじる、もし寓意のない単なる文字の遊びであれば、査慎行は「此種詩不作可也、集句雖工何所取義（この種の詩作らなくていい、古人の成句を巧みに集めて使っても、意において取るところはどこにあるか）」（王安石の「胡

筋十八拍」を評する）と言い切る（『初白庵詩評』巻二）。辞より意を先にする、内容と形式との厚薄に査慎行は躊躇なく内容を優先した。詩の寓意には軽重があり、それによって、詩の品格が決定づけられる。ゆえに、詩を鑑別評定するには、先に作者の寓意を見るべきである。

『蓮坡詩話』に収録された査慎行の詩論の「詩之厚、在意不在辭」からも、査慎行の「意」を重視する詩学思想が読み取れる。査慎行は詩において「厚」という審美基準を設け、その「厚」と「意」と「辭」の関係を解説するには、『初白庵詩評』に査慎行が詩の寓意を評するときしばしば使った「用意深厚」という表現が参考になる。例えば、陶淵明の「贈長沙公族祖」を評するとき、「生民」之詩追本姜嫄、「思文」之詩郊祀后稷、参之以「常棣」、「伐木」、「行葦」、「鳧鷖」、方知作者用意深厚（「生民」の詩は姜嫄まで溯り、「思文」の詩は后稷を郊祀することを詠う。「常棣」、「伐木」、「行葦」、「鳧鷖」を参考にすると、作者の意図の深さがはじめて分る）。と述べ、査慎行は陶淵明の詩を『詩経』の「生民」、「思文」、「常棣」、「伐木」、「行葦」、「鳧鷖」にたとえ、寓意の高尚と表現の婉曲を高く評価した（『初白庵詩評』巻一）。婉曲な表現で重大な主題を詠い、読者に言外の深意を匂わせ、それによって、詩に重厚感を生じさせているのである。思うに、査慎行が言う「詩之厚、在意不在辭」とは、辞を無視する意味ではなく、詩の寓意を直接言葉で表さないことである。

杜甫の詩も査慎行が求める「深厚」感のある詩の代表であろう。『初白庵詩評』には杜甫の「冬狩行」について「責望之意隱然言外（求め望む意は隱然と言外に隠れている）」とあり（『初白庵詩評』巻一）、「病馬」について、「一篇之中多少感慨寄託令読者玩味不尽（一篇の中沢山の感慨寄託があり、読者に尽くし難い楽しみを与える）」と高く讃える（『初白庵詩評』巻一）。

というのは、査慎行の求める詩の「厚」は、「卑（品格の低いもの）」の反対であり、又、「浅（表現の薄っぺらなもの）」の反義語でもある。作者は詩に言外の深意を託し、文字で構築した有限の詩篇に無限の空間を与え、読者に深く

吟味させる。同じ趣旨は『敬業堂詩集』卷三十八の「題同年張蒿陸落葉詩卷後」の「詩境全從寄託深、開編靜対見君心（詩の境界は全て深い寄託から醸しだされ、詩集を開けば、君の心と静かに対面する）。」の詩句からも読み取ることができる。

二 「詩境正以屢見為嫌」

『初白庵詩評』では「奇」を以って詩を賞賛することが目につく。以下に数例を取り上げる：

- 「奇幻峭健、發端奇橫（奇異で雄健、發端が新奇で予想外である）。」（杜甫の「奉先劉少府新畫山水陣歌」を評する、『初白庵詩評』卷一）
- 「奇事以奇筆寫之、如兔起鶻落、稍縱則逝矣（奇異なことを奇妙な筆法で書き、まるで兔起鶻落のごとく、すこしでも勝手にさせれば、すぐにいなくなってしまう）。」（杜甫の「義鶻」を評する、『初白庵詩評』卷一）
- 「奇而確（奇異で確実である）。」（杜甫の「可嘆」の「天上浮雲如白衣」の二句を評する、『初白庵詩評』卷一）
- 「奇崛（奇抜である）。」（杜甫の「君不見簡蘇侯」の「百年死樹中琴瑟」の二句を評する、『初白庵詩評』卷一）
- 「是公少年作、未足盡其奇（これは先生の若いときの作品で、未だその奇を尽くしていない）。」（杜甫の「登兗州城樓」を評する、『初白庵詩評』卷一）
- 「極奇、極幻、極遠、極近境界俱從靜中寫出（奇を極め、幻を極め、遠を極め、近を極めた境地はともに静の中から描き出されている）。」（蘇軾の「舟中夜起」を評する、『初白庵詩評』卷二）
- 「奇想中有妙理（奇妙な発想の中に絶妙な道理がある）。」（元好問の「北邙」の「焉知原上塚、不有當年吾」を評する、『初白庵詩評』卷二）

総じて、査慎行が詩において楽しむその「奇」には、発想の「奇」もあり、詩境の「奇」もあり、表現の「奇」もあ

る。蘇軾の「楊康功有石狀如醉道士為賦此詩」に対して、査慎行は「發端落想迴不猶人、筆亦不可捉摸（発想がまったく他の人と違い、筆法も亦計り知れない）」と褒め称える（『初白庵詩評』卷二）。発想の自由奔放さ、筆法の千変万化こそが、査慎行が評価する「奇」の内容である。その作品に傾倒する査慎行の評語からは彼の「奇」への追求とその内包が窺える。

「新」や「生」への追求も査慎行が詩に求める「奇」の一面である。「詩境正以屢見為嫌（詩の境地について言えば、まさしく、ありふれたものは避けるということだ）」との言葉からも分かる通り、千篇一律、千人一面の詩については、査慎行ははつきりと批判の意をあらわにした。彼は陸游の「入城至郡園及諸家園亭遊人甚盛」について、こう語る。「劍南詩非不佳，只是蹊徑太熟，章法句法未免雷同，不耐多看。（劍南の詩は良くないわけではないが、ただ慣れた詩法に拘り、詩全体の構成や文の構成は雷同してしまうくらいがあり、多く見るには耐えない。）」（『初白庵詩評』卷三）自分の作詩については、彼は「每從熟處欲求生（いつものありきたりのところにおいて目新しさを求める）」と述べ、たとえ「眼前語（よくある言葉）」でも「未經人道（まだこのように使われていない）」であろうとするなど、「生」にこだわりのありきたりの古い型の打破を強く訴えた。面白いことに、査慎行の詩はよく陸游の詩と比べられる。趙翼は二人の詩についてこう語る。「放翁多自寫胸臆，非因人因地，曲折以赴，往往先得佳句，而足成之。初白則隨事隨人，各如其量，肖物能工，用意必切，其不如放翁之大在此，而較放翁更難亦在此（陸游の詩は多く自らの胸中を書くもので、その人その場を見て適切な表現を探して描写するのではなく、往々にして先ず佳句を得て、そして他の部分を補足して詩を書き上げる。査慎行はその事その人に従って、過不足なく適切に書く。眞に迫ってものを模り、意の用い方も必ず適當である。彼の詩は陸游の詩の広大さに適わないのはそこにあるが、しかし、彼の詩が陸游の詩より難しいものもそこにある）。⁽⁹⁾これは陸游の詩の「蹊徑太熟」と査慎行の「每從熟處欲求生」から生じた差異ではないかと思われる。

明の詩壇では、唐詩を標榜し、模擬踏襲の詩風が盛んに流行しており、前人の残したありきたりの型を踏み、使い古

した意象を用い、千人一面の詩が次々と現れた。清初の詩壇にも明詩の遺風がまだ根強かった。奇を珍重し、「生」を求め、ありふれた詩境を厭う、査慎行の取捨は、模擬踏襲詩風からの突破と反発ととらえることができ、新しい詩の時代を切り開くために必須の資質を見せている。

一方、詩に「奇」と「新」を求め楽しむ査慎行は、『初白庵詩評』巻一に杜甫の「元都壇歌」の「子規夜啼山竹裂（ホトトギスが夜に啼き、メダケが裂ける）」の二句を賞賛し、「使昌谷為之便墮鬼趣（李賀に作らせれば、鬼趣になってしまうだろう）」と話した。又、『初白庵詩評』巻二では、盧仝及びその追隨者を辛辣な口調で指摘し批判した元好問の「論詩三十首」の第十三首の詩論に同調し、「掃尽詭怪一派（怪奇な詩風を一掃する）」と高く誉めたてている。「墮」と「掃尽」の二語からは、李賀や盧仝が代表する怪奇詩風に対する、査慎行の批判的な態度がはっきり映しだされる。詩に「新」と「奇」を求めると同時に、査慎行は李賀の詩を代表とする幻想的で怪奇な詩風には排斥的な傾向を示した。その理由は、彼のもう一つの重要な詩の美的理念の「淡」に因る。それについては、次章で述べる。

三 「淡而彌旨」

査慎行は、詩を論じる時に、一方で詩に「奇」、「新」、「生」を求めながら、また一方では晦渋な詩を斥ける。たとえば、王建の「原上新春」に附した評では、「寧取平易勿取艱澀生新（晦渋で生新な詩より、寧ろ平易を取る）」と述べているのである（『初白庵詩評』巻三）。査慎行が求める「奇」、「生」と「新」は、斬新で独特な詩であり、決して晦渋によるものではない。

しかし、査慎行がここで述べる「平易」とは、単なる「平易」ではない。「詩之淡、在脱不在易」との評語に見えるように、詩の淡は平易さの中にあるのではなく、「脱」の中にあるのである。確かに、「脱」にも「易」の意味がある⁽¹¹⁾。しかし、査慎行がここで言う「脱」と「易」は同じものではない。

『初白庵詩評』には「鍊字」と「鍊句」への言及が多く見られる。

●「毎句中看他煉字之法（各句に彼の字を練る方法が見いだされる）。」（杜甫の「野望」の「遠水兼天淨」の六句への評、『初白庵詩評』巻一）

●「細味之、可悟煉字之法（子細に味わうと字を練る方法を悟ることができる）。」（杜甫の「晚晴」の「夕陽薰細草」への評、『初白庵詩評』巻一）

●「於此可悟煉字之法、妙處贊嘆不盡（ここに於いて字を練る方法を悟ることができる、その良さについてしきりに贊嘆する）。」（杜甫の「上兜率寺」の「江山有巴蜀」の二句を評する、『初白庵詩評』巻一）

●「極錘煉、極自在（練り上げた思惟を極め、自在を極める）。」（杜甫の「章梓州水亭」の「吏人橋外少」の二句への評、『初白庵詩評』巻一）

●「意思曲折、亦從煉句得之（意味が曲折であるが、これも句を練ることによって得たものである）。」（白居易の「酬裴相公題興化小池見招長句」の「蓬斷偶飄桃李徑」の二句への評、『初白庵詩評』巻一）

●「熟玩可悟煉句之法（よく吟味すると句を練る方法を悟ることができる）。」（王安石的「憶北山送勝上人」の「雲埋樵聲隔芻蒨」の二句への評、『初白庵詩評』巻二）

そこから、詩人の「煉字」と「煉句」に対する熱い姿勢が感じられる。査慎行は王安石的「悟真院」の「春風日日吹香草」の二句を「烹煉之至、漸近自然（練り上げた思惟を極めれば次第に自然に近づく）」と賞賛する（『初白庵詩評』巻二）。「春風日日吹香草、山北山南路欲無（春風が日々香草を吹き、山の北、山の南に路が消えようとする）」とするこの詩句は、難解な字はなく、ごく自然で淡白なものであるが、その自然さを鍛えに鍛え練りに練り上げて至った至高の境地であるとするのである。又、王維の「晚春答嚴少尹諸公見過」の「鶯啼過落花」に見える「過」字について、「過字千錘百鍊而出於自然（過の字は鍛えに鍛え練りに練ったものではあるが、同時に自然に湧き出たものでもある）」

〔「初白庵詩評」卷三〕。字を練り、句を練り、それを極めれば、詩は自然なものとなり、澹泊になる。査慎行は求める「淡」はまずは「千鍾百鍊」を経て到達した「淡」の境地である。

又、韓愈の「崔十六少府攝伊陽以詩及書見投因酬三十韻」について「掇拾瑣細、具見其真情、初讀似平淡、愈讀愈有味、累幅連行、不覺其冗、使元白為之未免涉淺易矣（些細なことを集めて書いていただけだが、悉く作者の真情が見える。初めて読んだときは平淡に見えたが、読めば読むほど味わい深い、長々と書き連ねても、冗長とは思えない、元稹と白居易に書かせたら、どうしても浅薄平易になる。）」と、一見平淡な詩境に見えてしまうが、実は嘯めば嘯むほど作者の深い真情が味わえると述べた（『初白庵詩評』卷二）。

「詩之淡、在脫不在易（詩の淡、脱にあり、易にない）」、査慎行が求める淡は「千鍾百鍊」を経った「淡」であり、平淡の表面下に深い真情が潜む「淡」であり、嘯めば嘯むほど深い味が溢れる「淡」である。

蘇軾の「書黃子思詩集後」には、韋應物と柳宗元の詩について、「發纖穠於簡古、寄至味於澹泊（簡古に於いて纖穠を發し、澹泊において至味を寄せる）」とあるが、同様に査慎行もよく「淡」と「旨（旨み）」を組み合わせて詩を評する、例えば、蘇軾の「和晁同年九日見寄」の「古來重九皆如此」の二句について、査慎行は「淡而彌旨（淡白であるが、いよいよ味が深い）」と賞賛する（『初白庵詩評』卷二）。

詩に新と奇を求める査慎行の審美主義は彼の平淡を好む趣旨と一見矛盾しているように見えるが、しかし、新と奇がなければ、平淡も単なる平庸になり、所謂「淡而彌旨（淡白であるが、いよいよ味が深い）」も空しい言葉となる。査慎行の言う平淡は平淡でありながら目新しさを出し、平常語を使いながらも新鮮感を読者に与えることである。

査慎行が一生をかけて作った夥しい数の詩を総じてみれば、その風格は画一ではないが、全体を見渡すと、青年時代の雄健から中年以降の淡泊への趨向が見られる。詩の平淡を楽しみ、詩に老境を求める、これは経験と創作を重ねていくにつれて、段々と成熟していく一人の詩人の自然な選択である。

査慎行の淡泊詩風の形成過程において、禪の「空」と「静」の思想の働きも看過できない。それについては、次章で述べる。

四 「禪理也可悟詩境」

蘇軾は「送參寥師」において「欲令詩語妙，無厭空且静，静故了羣動，空故納萬境（詩句をよくしようとするのなら、空と静を厭うことはない。静であるがゆえに色々な動きが分り、空であるがゆえに千万の境界を納めるのだ）」との詩論を展開している。⁽¹³⁾ 蘇軾のこの詩に対して、査慎行は「禪理也可悟詩境（禪理からも詩の境地を悟ることができる）」と述べ、詩学思想に禪理を積極的に受け入れる姿勢を示した（『初白庵詩評』卷二）。

詩に禪理を取り入れる、禪理をもって詩を喩える、といった禪と詩の融合は唐から始まり、宋になって盛んになる。一方、禪と詩の対立関係を唱える説は禪林においても詩壇においても後を絶たず、禪理は詩の「言志」の伝統を妨げるとの発言も少なくない。詩と禪の関係について、蘇軾は詩僧の參寥に送る送別詩の「送參寥師」にとりわけ禪の空観と静観から詩法における禪理の積極的な役割を論じ、「詩法不相妨（禪と詩はお互いに妨げることはない）」と禪理に肯定的な態度を取る。蘇軾と同じ、査慎行も禪を熱愛した一人である。蘇軾の「送參寥師」の詩学思想を受け容れ、査慎行も禪の静観と空観を自分の詩学思想に取り込んだ。

『初白庵詩評』には、「細静」との語を用いて、詩の境地を評価することが多くみられる。例えば：

- 「詩境細静（詩の境地は静かである）。」（杜甫の「題張氏隱居二首」の其一を評する、『初白庵詩評』卷一）
- 「詩境細静（詩の境地は静かである）。」（白居易の「送兄弟回雪夜」の「寂寞滿爐灰」の六句を評する、『初白庵詩評』卷一）
- 「詩境細静，耐人玩味（詩の境地は静であり、よく吟味するのに耐える）。」（蘇軾の「雨中過舒教授」の「此

生憂患中」の二句を評する、『初白庵詩評』卷二)

又、杜甫の「倦夜」に対して、「靜極細極、此段境界他人百舍不能至也（靜極まり、細極まり、他人はこの境地に百舍も遠く及ばない）」と贊辭を惜しまなかった（『初白庵詩評』卷一）。

「細靜」とは、ごく靜かという意味である。しばしば座禪で到達した安靜な境界を指す。査慎行はそれを詩の境地の一つとして、高く評価する。前述した蘇軾の「舟中夜起」については、査慎行は「極奇極幻極遠極近境界俱從靜中寫出」と語り、蘇軾の「靜故了羣動」という考え方に深く影響を受けたことがわかる（『初白庵詩評』卷二）。

査慎行の詩論においては「空」も重要な部分を占める。「詩之靈、在空不在巧」との評語に見えるように、彼が詩に求める「靈」は「空」にあり、「巧」にあるものではない。査慎行は蘇軾の「和子由論書」の「吾聞古書法」という四句に付した評語において、「所謂寧拙毋巧（所謂巧みであるよりも寧ろつたない方がよい）」と述べ、「巧」よりも「拙」を取る姿勢を明らかにした（『初白庵詩評』卷二）。又、蘇軾の「和仲伯達」に対しては、「刻畫過巧（二句の描写は巧み過ぎる）」と指摘している（『初白庵詩評』卷二）。査慎行は言葉の巧みさを好まなかった。それは、「空故納萬境」の考え方に由来するのではないかと考えられる。「空」であるが故に、無窮の境地を内包できる。しかし、一旦巧妙で緻密な描写を施すと、読者の想像（悟）の空間を奪い、詩境も却って狭く、堅苦しくなる。

蘇軾の「送參寥師」は主に詩の創作過程のなかで禪の靜觀と空觀が創作者の精神状態に働いた重要な役割について語っている。査慎行はそれを受け容れた上、特に詩の境地と創作手法における「靜」と「空」を推奨し、自らの創作実践にも貫いた。査慎行の『敬業堂詩集』に、粉飾を一切施さず、白描の手法で淡々と寂寥な意境を醸し出す、このような作品は少なくなく、時の人に高く評価された。「舟夜書所見」⁽¹⁴⁾はその代表作品であるといえよう。

月黒見漁燈、孤光一点螢。微微風簇浪、散作滿河星。（舟夜書所見）

月は暗く、漁火が見え、螢のような一つ星。わずかな風で波はおし集まり、又、散らばり、川に星が満ちる。

五 「以文為詩、何意不達」

蘇軾の「和子由論書」に見える「苟能通其意，常謂不學可（もしその意が通じれば、学ばなくて良いとよく言われる）」の二つの詩句について、「以文為詩、何意不達（文を以って詩を為せば、どんな意味でも伝えることができる）」と査慎行は評価し、詩句の散文化に対して支持の立場を明らかにした（『初白庵詩評』卷二）。

査慎行は「以文為詩」のもう一つ大きな特徴である「以議論為詩（議論を以って詩を為す）」にも肯定的な態度を取っている。

嚴羽は宋詩の弊害を「以文字為詩，以議論為詩，以才學為詩（文字を以って詩を為す，議論を以って詩を為す，才学を以って詩を為す）」⁽¹⁵⁾と指摘する。実は詩に議論を多く持ち込むことはすでに唐の杜甫の詩にも多く見られ、宋になると盛んになり、宋詩の一つの特徴として認識されるものだが、詩の議論、詩の理趣という点において、査慎行は凡そ積極的にそれらを評価している。例えば

● 「議論正大光明（議論が公明正大である）。」（杜甫の「石犀行」の「先王作法皆正道」の二句への評、『初白庵詩評』卷二）

● 「此段議論、天地間亦不可少（この議論は世の中に欠かせない）。」（白居易の「和答詩十首」の「答四皓廟」の「勿高巢與由」の八句への評、『初白庵詩評』卷二）

● 「妙想妙論（いい発想，いい論議）。」（白居易「題舊寫真圖」の「如弟對老兄」への評、『初白庵詩評』卷二）

● 「沒緊要處着議論自妙（重要ではない点について議論をしたことによって詩が巧妙になった）」（王安石の「奉酬約之見招」の「馮軾信厚禮」の二句への評、『初白庵詩評』卷二）

● 「發論必透徹中邊（論議を發すると必ず内外表裏ともに透徹するものだ）。」（蘇軾の「秀州僧本瑩靜照堂」の「鳥

因不忘飛」の八句への評、『初白庵詩評』卷二)

- 「説透至理。覺昌黎衡山一章尚帶腐氣（もつともな道理をすつきり言い尽くした。韓愈の「衡山」はまだ陳腐な雰囲気があるように思われる。）」（蘇軾の「泗州僧伽塔」の「耕田欲雨刈欲晴」の八句への評、『初白庵詩評』卷二）

- 「遊戲成篇、理趣具足。深于禪悟、手敏心靈（遊び心で詩篇を書き上げ、哲理も興味も全部備わっている。禪悟に造詣が深いゆえ、機転が利いて賢く、手が鋭敏である）」（蘇軾の「泛潁」の「畫船俯明鏡」の十二句への評、『初白庵詩評』卷二）

趙翼の『瓊北詩話』に「文を以って詩を為す」についてこのような叙述がある：「以文為詩，自昌黎始，至東坡益大放厥詞，別開生面，成一代大觀。（文を以って詩を為すことは、韓愈から始まり、蘇軾になると益々大いに発揚し、新しい機軸を開いて、其の時代の大観となる。）」⁽¹⁶⁾「文を以って詩を為す」ことは宋詩の特徴の一つとして、非難を浴びせられることが多い。清初の詩壇において、宋詩をめぐる論争が喧しい中、査慎行は江西詩派の浅俗を指摘したことがあるが、宋詩風の大きな特徴である「文を以って詩を為す」、「議論を以って詩を為す」ことには躊躇することなく支持する態度を示している。詩句の構造の散文化と議論化は査慎行の本人の詩にも反映され、査慎行の詩の大きな特徴の一つとして詩評家に挙げられている。

六 結語

査慎行の詩学思想は、「意」を優先しているがそれを直接に表現するのを避け、「奇」を楽しむが怪奇な詩風を好まず、「淡」を重視するが旨みのない平淡は拒む。又、「万境」を含んだ「空」と「群動」を際立たせる「静」を求める。それは査慎行の所謂「須辨毫髮於疑似之間」である。そのほかに、「使事無痕（典故を使うときは跡を残さない。）」（『初白

庵詩評』巻二)や「人言古詩不論平仄、窃以為不然(古詩は平仄にこだわらないとよく言われるが、私はそう思わない)。(『初白庵詩評巻二』)等の評語からは、査慎行の典故の用い方や詩の平仄に関する意見も窺える。総じて見れば、この『初白庵詩評』は実に査慎行の様々な詩法思想を反映している。

『初白庵詩評』からは査慎行が蘇軾の詩に特に力を入れていることが分かる。『初白庵詩評』の纂例にも「先生篤好蘇詩、評語較詳(先生は蘇軾の詩を特に好み、評語は比較的詳しい)」とはっきり記述される。『初白庵詩評』からは査慎行の蘇軾の「奇」、「淡」、「空」、「静」、「以文為詩」、「理趣」などの特徴への傾倒が読み取れる。査慎行の詩法は蘇軾からのものが多い、それは査慎行が宋詩派の代表詩人と見なされる主な理由である。

だが、査慎行におけるもう一人の詩人の影響を見逃すことはできない。『初白庵詩評』の纂例には「先生評閱杜詩凡五本(先生が杜詩を評点して、凡そ五冊になる。)」との記述がある。杜甫の詩は『初白庵詩評』で色々な方面で高く評価され、特に杜詩の「用意深厚」について。一つ注目しなければならないのは、査慎行は蘇軾の詩について、「神似杜陵(杜甫にそっくりだ)」「(『初白庵詩評』巻二)、「得少陵神味(杜甫の神髄を得ている)」「(『初白庵詩評』巻二)などと絶賛することが多い。蘇軾の詩は杜甫の詩に共通していることを査慎行はこう指摘する。査慎行の詩学伝承について近くは蘇軾、遠くは杜甫にまで遡る。

杜甫と蘇軾だけではなく、査慎行が詩法の手本とする対象については、時代を限らず、詩派も問わないことが『初白庵詩評』からわかる。又、彼の詩論には儒家の詩論に拘らず、禅理の静観と空観の影響をも強く受けている。査慎行の詩学思想は多くの思想を兼ね包容していると言えよう。それは査慎行の詩「得宋人之長而不染其弊(宋詩の長所を得て、その短所に影響されない。)」⁽¹⁷⁾の理由ではないかと思われる。

査慎行に関する研究は、主に査慎行の詩集の『敬業堂詩集』に集中している。それについては、嚴迪昌の「査慎行論」⁽¹⁸⁾などに詳しい論述がある。しかし、この多作な詩人の詩学思想についての研究は作品集の研究に触れられたことは

あるが、具体的に検証されたことは未だ少ない。彼の『初白庵詩評』は、論理的な著述ではなく、その多くは感想を綴った評点の形をとっていて、理論的な影響力はそれほど強くないため、未ださほど注目されていない。しかし、査慎行は古今の多くの詩人から詩法を学び、また沢山の創作実践を経て、その結果として開花したのが『蓮坡詩話』に記載された「厚、雄、靈、淡」の四つの審美理想である。『初白庵詩話』はまさに査慎行の詩学思想の形成過程における原始記録と言えよう。『初白庵詩評』の研究は査慎行の詩学思想と作品研究に有用であるため、本論に至った次第である。

注

(1) 査慎行（一六五〇～一七二七）、本名は嗣璉、字は夏重。後に名を慎行、字を悔余と改めた。号は他山、晩年の号は初白庵主人である。

(2) 趙翼『瓊北詩話』卷十（上海古籍出版社一九八三年版『清詩話統編』本）

(3) 徐世昌『晚晴簃詩匯』卷五十六査慎行條（民国退耕堂刻本）

(4) 査為仁『蓮坡詩話』（上海古籍出版社『清詩話』本）

(5) 査慎行『初白庵詩評』（乾隆四十二年跋刊本）

(6) 『初白庵詩評』卷一に白居易の「詠懷」の「遑遑于世者」から最後の部分について、「詩境正以屢見為嫌」とある。

(7) 『敬業堂詩集』卷二十「涿州過渡」（『敬行堂詩集』康熙五十八年序刊本）

(8) 『初白庵詩評』卷二に杜甫の「江村」の「自去自來堂上燕、相親相近水中鷗」の二句について、「眼前語卻未經人道」とある。

(9) 趙翼『瓊北詩話』卷十（上海古籍出版社『清詩話統編』本）

(10) 元好問「論詩三十首」の十三：「万古文章有坦途，縱橫誰似玉川盧。真書不入今人眼，兒童從教鬼面符。」

(11) 『左傳・僖公三十三年』：「輕則寡謀，無禮則脫。」杜預は「脱、易也」と注する。

(12) 『東坡後集』卷九（明嘉靖十三年刊本『蘇文忠公全集』）

(13) 『東坡後集』卷十（明嘉靖十三年刊本『蘇文忠公全集』）

- (14) 『敬業堂詩集』卷九（康熙五十八年序刊本）
- (15) 敝羽『滄浪詩話』（清乾隆刊本『歷代詩話』本）
- (16) 趙翼『瓠北詩話』卷五（上海古籍出版社『清詩話統編』本）
- (17) 『四庫全書總目提要』卷百七十三（民國二十二年上海商務印書館排印本）
- (18) 『文学遺産』一九九六年五期